

セッション No.1の発表に対するコメント

袁 輪 顕 量

石田尚敬氏、師茂樹氏ともに人間の新たな定義を考えさせる良い発表であったと思います。石田氏の発表は、大きく二つに分かれ、人間観を廻る日本仏教学会の過去の取り組みを概観し、ついで脳死問題に焦点を当てて、人間のありべき姿を提示しようとするものでした。人間をどのようなものとして捉えるのか、現代の様々な問題を考えるに際して、もっとも基本に存在しているものだと考えます。

一、石田尚敬氏の発表「現代社会における人間の欲望

——インド仏教思想を手掛かりとして——について

石田氏の発表は、初期仏典を踏まえ、人間を必ず死ぬ存在として捉えることを重視し、死を受容することの大切さを示しました。中村元先生がかつて述べられたことを踏まえ、ついで、現実生きていく上で問題となっている今の問題が、人間の欲望に根ざしていると分析し、「足るを知る」ことの重要性を示しました。生死を当たり前のものとして受容する、それは生老病死を忌避しえないこととして受容する、釈尊に直結するものです。ともすれば、老や病氣、そして死を避けたいと願ってしまうのが凡夫の性だと思いますが、それを超えるためにはどうすれば良

いのか、考えさせられるところです。

脳死を廻る問題は、石田氏は看護専門学校でも講義を担当しているとのことですので、おそらく普段から考察をしている部分ではないかと思います。脳死は、一九八〇年代に社会問題として大きくクローズアップされ、中曽根内閣の時に脳死臨調なるものが組織され、大々的に議論された問題でした。人間を脳が支配するマシンのように捉える考え方が提示されましたが、一方で、文化的に日本人がこの身体を大切にし、脳の死のみで「ヒトの死」を捉えることは出来ないとの考え方も提示され、当時、大きな話題になりました。脳死と臓器移植とは密接な関係にあり、臓器の提供者の家族の精神的な問題なども深く議論されたと思います。その時、大きな問題の一つとして挙げられたものは、人間の内的な意識でした。医師が観ているのは、そこから観察して分かる意識が中心であって、その人が持っている内的な意識には目が向いていないということも、指摘されたように思います。人間が死にゆく時には三段階があつて、明瞭なる意識の段階から不明瞭な段階へ、そして悶絶の段階へ入るという記述が、日本の貞慶が『阿毘達摩雜集論』を引用して、「臨終の心得」の中で述べていたのを思い出します。

現在、脳死は少なからず発生しているのに臓器移植があまり進まないという状況があるようですが、そこには人間をどう捉えるかという問題が、根本的には人間の文化の問題が潜んでいると言えます。結局、人間をどう捉えるのか、という問題に帰着することになるのだと思います。

人間を機械のように捉え、脳がすべての指示を出している司令塔だと捉えれば、脳以外の身体はすべて、支配されているものになります。ですから、その支配している主としての脳の機能がだめになれば、その他の客としての臓器もすべてだめになる、という機械論的な人間観が、半ば強制的に作られようとしたと位置づけることが出来るかと思います。しかし、この考え方は大いに問題があり、たとえば心臓移植は可能なことが知られていると思いますが、支配しているはずの脳から切り離されて他人の身体の中で機能するのですから、脳によって支配されている

という前提そのものが成り立たないことはすぐに分かるかと思います。

このような主と客のような関係ではなく、臓器同士が連絡を取り合っていると考える中国医学の臓腑の概念もありますので、東アジアの世界では人間に対する考え方がやはり独自であると見て良いのかも知れません。人間の身体はやはり特別なものとする、なかなか言葉では表現することの困難な何かが存在しているのでしょうか。しかも、他者からは分からない内的な意識の問題に目を向けた時に、より臓器移植は慎重にならざるを得ないのかも知れません。

さて、脳死と臓器移植の問題は、日本では一九八〇年代後半に盛んに議論され、やがて、二〇〇〇年代の前後から誕生に関連することに関心が移っていきます。しかし、この点はアメリカとは大きく異なることが指摘されています。アメリカでは誕生の問題から脳死状態の人の家族の問題に、関心が移ったと言われます。アメリカでは脳死と臓器移植が一九八〇年代に実際に盛んに行われ（その背景に自動車事故があつたと言われます。あまりにも多くの方が脳死状態になるので、保険会社が自動車メーカーを訴え、エアバッグが標準装備化されていくといった動きがありました）、その後になつて臓器提供者の家族の精神的なケアの問題が議論されるに到りましたが、日本では逆に、脳死の問題が議論された時に、家族の抱える精神的な問題がすでに十分に議論されたように思います。

さて、石田氏は、かつて印仏学会で議論された臓器移植で生き延びようとする姿勢に、欲望の充足が目指されていること、しかしながら、「臓器提供を受けなければ助からない者が身内の場合」にどのように考えるのか、おそらくその態度は異なってくるのではないか、との指摘を正面から受け止め、「知足」というありようの大切さを再確認するという立場に立ちました。これは、おそらく「一人称の死」「二人称の死」と言われるものと関連しての言及かと拝察しました。

この論述からすれば、石田氏は、「人間は自らの欲望に支配される存在である」との、どちらかと言えば凡夫の

ありようが普通の人間であると定義し、その普通の人間が、「足るを知る」ことで、その抱える欲望に全面的に支配されないようになることが大切だ、と提言していると言えましょう。概して、基本的なところを再確認させられる発表であったと思います。

さて、石田氏の発表の中で、臓器移植の問題がクローズアップされましたが、一つ質問があります。臓器を提供される側、すなわち移植を待つ患者の間に、優先順位が出来てしまうことを仄聞しますが、臓器移植という医療行為には必ず提供者の死という現実と、臓器の受け手の優先順位という命の差異化が生じるように思います。この命の差異化という問題に、どのように対応していくのが望ましいのか、意見を聞かせていただければと思います。

二、師茂樹氏の発表「人工知能を有情と見なすことは可能か」について

次に師氏の発表は、現代のIT技術の進歩に関連する問題を正面から扱ったものでした。タイトルに「有情」という用語が使われているところに、人間かどうかという問題を避けようとする姿勢が若干、垣間見えますが、情すなわち感情や情動などでしょうか、それらを持ったものが有情でしょうか、一応、有情ということで話を進めたいと思います。

師氏の発表は、IT技術の進化によって人工知能が可能な時代となり、ロボットが自ら思考するというような時代における、人間観を考える切っ掛けを提供しようという意図はよく分かるものでした。師氏の発表に対して、IT事情に詳しくない小生がコメントをするのは的外れになる可能性が高く、気が引けるのですが、素朴なコメントと思って聞いてください。

さて、師氏の発表要旨を見て最初に考えたのは、手塚治虫の漫画に登場するヒーローの鉄腕アトムや本田技研の

AIBOのことでした。後者のAIBOは、すでに介護などの福祉分野に実際に導入され、多くの老人ホームなどにおいて活躍しています。入所者の人たちから、周りを明るくするとか、かわいいたか言われ、人気を得ていると聞いています。しかしAIBOは人間でしょうか、あるいは師氏の言葉を借りて言えば、「有情」でしょうか。答えは否だと思えます。多くの方はAIBOを人間とか有情とかは思わないように思います。何故でしょうか。

師氏は、人間の定義に関わるものとして『俱舍論』の命根の定義を引用し、温かさと認識の機能が存在することが命根を成立させるのだという考えを紹介しました。この考えに立てば、熱と認識の機能があれば、人間ということになりそうです。しかし、日本の唯識でよく言われることなのですが、私たち人間は「情動」を持った存在です。感情的な意識を不可欠な要素として持っています。しかも、かなり個人差のある不確定な感情です。この点から考えますと、人工知能を持った存在にも、たとえば「悩み」や「苦しみ」などの感情が存在しているのでしょうか。手塚治虫の鉄腕アトムは、確かに悩める存在でしたが、現実のAI技術の世界に、まだそのような話を聞いたことがありません。

次に認識の働きから見ていきたいと思います。これは日本の院政期から中世にかけて活躍した実範、貞慶、良算の手になる真理に関する短い文章を集めた資料なのですが、『真理鈔』と呼ばれる興味深いものがあります。そこに、「問、戲論者何者哉。答、疏云、戲論者、謂分別相・名言相・尋思相。由戲論故、執着染淨。有所分別故、生死生死（文）。（質問する、戲論とはどのようなものか。答える、疏に次のようにある、戲論とは分別の相、名言の相、尋思の相である。戲論によるので、染まるか淨いかに執着する。分別するところがあるので、生死し生死する。）」（鈴木学術財団版 日本大蔵経六四、四七下）とあります。ここに挙げられている疏は、慈恩基撰の『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚』でして、まったく同じ記述が「戲論者謂分別相名言相尋思相。由戲論故、執着染淨有所分別。分別故生死。」（大正三三、五一a）とあります。人間の持っている心の働きに、もつとも原文では

「戯論」と表現されていますが、「分別・名言・尋思」という働きが存在するという考え方ができます。まん中の名言は名前を付けてしまうという機能です。私たちは世界を認識した時にすぐに、それに名前を付します。たとえば机を見たら、すぐに「机」、椅子であれば「椅子」というように、すぐに名前が付されます。

このような働きが起きる時に実際に、私たちの心の中に起きている作用を考えてみますと、まず眼根を通じて外界の光刺激が捉えられて、心の中に認識の対象になるイメージ（影像）が描かれます。次に、そのイメージに対して、名言が付されているように思います。でも、もう少し精しく考えてみれば、描かれたイメージは、漠然として曖昧な広いものだと思いますが、それを色と形に随って他と区分する分別の働きが、まずはすぐに起きています。そして、その分別の上で、区別立てされた一つのものに対して、「机」という名言が付されているように考えられます。つまり、人間の認識の構造は、三層構造として考えられるのではないかと思います。しかも、その他に「尋思」という、あれこれと勝手に思考する働きが存在します。繰り返しになりますが、まずはイメージ、そして区別立ての「分別」、それから「名言」や「尋思」というような働きが、私たちの心の中には常に起きているのではないのでしょうか。

さて、認識構造がそのようなものであると捉えた場合に、人工知能にもそのような働きが出来るのでしょうか。これがまず第一の質問です。しかも、人間の認識の時には、与えられた刺激を受け止め、それを心の中に捉まえられる対象として描き出し、そのイメージを分別し、その後で名言や尋思が生まれると先に述べましたが、尋思は、千差万別ではないかと思えます。たとえば「机」という名言が生まれて、その後に尋思として「小さいな」とか「大きいな」とか「変な形だな」とか、同じ対象に対して、人によって、様々に異なる想いが生まれると思います。しかも、時には、誤ってものを心の中に描くことも存在します。たとえば、縄を蛇と間違えるように。

このように、同じものを見ても、それに対して生じる想いは多様性を持ち、人間個々に異なると思うのですが、

AIはそのような多様な想いを生じさせることが出来るのでしょうか。この想いは「感情」と言っても良いのではないかと思います。感情を持つことは出来るのでしょうか。もし、仮に持てたとしたら、その感情は、どのように表現されるのでしょうか。

それから、もう一つは死の問題です。現実の人間の場合には、死は不可避の問題としてDNAの中に組み込まれています。生涯に何回細胞が分裂できるのか、DNA細胞の端の部分に繰り返しのパターンが存在していて、それが細胞の分裂回数を規定している、すなわち死が最初から組み込まれていると言います。これに対して、人工知能には自ら死ぬということがあり得るのでしょうか。どんなに長く生きても、百二十歳前後で必ず死ぬ存在であるというのが、人間の特徴のように思います。生老病死は人として避けられないもの、四苦はつきもの、というのが人間だと思います。かつて拝見した「名探偵コナン」というアニメの世界では、人工知能が自ら死ぬという設定がありました。現代のAIの世界に、人間の死と同じような死は存在するのでしょうか。

電源を落とせばそれは死と同じ、というような考えもあるかも知れませんが、この場合は電源を入れればまた元に戻りますので、不可逆的な死とは言えないと思います。また、プログラムで死を組み込んでおく、ということも可能かと思いますが、でも、この場合も、そのプログラムを変更することで、またAIとしては動き出していくことが出来るように思います。つまり、人間であれば、ただ一回きりの死を必ず迎えることになると思うのですが、AIの場合には、そのようなことがあり得るのでしょうか。自然と不可逆的な死を迎えることがあるのだろうかという素朴な疑問が湧きます。

勝手な想像に基づいたコメントというか、質問をさせていただきましたが、IT技術の進歩によって可能になってきているものが沢山あるように思います。しかしながら、どうしてもAIの技術では真似することが出来ない部分、生身の人間にはあるような気がします。そこが人間の定義を考える際に、一番、興味深い点、すなわち人間

の人間たる由縁、本質になるのではないかと思います。以上をもちましてコメントとさせていただきます。